

しんじゅく多文化共生プラザを訪問して

東京 23 区で、多文化共生のフロントランナーと言えどどこが連想されるでしょうか。東京 23 区のほぼ中央に位置し、有名な繁華街の歌舞伎町や、コリアンタウンと言われる大久保地区のある新宿区を挙げる人が多いでしょう。31 万人を超える区民のうち外国人登録者は 35,358 人(2010 年 6 月 1 日現在)。区民の 11.1%、およそ 9 人に 1 人は外国人です。大久保地区に限れば 33% 以上にもなります。その数は年々増加し、国籍も 116 カ国と多様です。新宿の街中を歩いていて、外国人とすれ違うことも、気がつけば隣に並んでいることも珍しいことはありません。では、新宿区は、日本人と外国人が「共生」している街として、どのような取り組みを進めているのでしょうか。

新宿区の多文化共生施策の発信基地は、歌舞伎町にある「しんじゅく多文化共生プラザ(以下、プラザ)」。6 月 29 日(火)、私たちは、新宿区文化観光国際課多文化共生担当副参事月橋さんとプラザ所長の宮端さんに、新宿区の多文化共生施策やその実態について、お話を伺ってきました。

プラザに入ると、壁をぎっしり埋めている資料や書籍とゆったり座って話ができる交流スペースが目に入りました。生活情報資料は入国管理、都内のイベント情報、日本語講座情報、区の行政情報など様々です。その中でも、「新宿区外国人区民のための生活情報」は、①緊急のとき②災害に備えて③区役所での届け出と手続き④税金・医療・保険⑤福祉⑥仕事⑦出産・子育て・教育⑧暮らし⑨お楽しみ情報⑩お得情報など外国人の気になる情報を分野別に分け、簡単に説明している冊子で、ルビ付き日本語、英語、中国語、韓国語で作成されています。基本的な情報や問い合わせ先等がまとまっていて、手にも取りやすく、分かりやすいものでした。

新宿区では、2010 年 3 月、外国人への情報提供を統一的な取り扱いの下に行っていくため「外国人への情報提供ガイドライン」を策定し、庁内の意識共有を目指しながら、外国語版の生活情報紙やホームページの作成、相談窓口の運営をしています。

プラザの中にも曜日や時間によって韓国語、英語、中国語をはじめ、タイ語やミャンマー語で相談ができる外国人相談コーナーと、東京入国管理局の運営

で、コーディネーターが入国・在留・日本での生活に関する相談に多言語で対応している外国人総合相談支援センターがあります。2005年9月の開館から今年3月末までの外国人相談コーナーの相談実績をみると、英語での相談343件に対し、タイ語での相談は566件と、件数としては220件以上上回っていて、その需要の多さが分かります。

一方、新宿区のミャンマー人の外国人登録者は韓国・朝鮮籍と中国人に次いで、3番目に多く、1,200名以上にのぼります。日本全国のミャンマー人外国人登録者数が6,735名(2007年12月末)であることを考えると、かなりの数値です。彼らの多くは新宿の中でも高田馬場に住んでいて、日本に来たのは仕事のため、勉強のためなど様々ですが、その数が今より15年ほど前に大きく増加したのは、軍事政権に反対し国を離れた学生運動のメンバーが住み始めたのがその理由の一つだと言われています。その後、高田馬場を中心にミャンマー人コミュニティが作られたことで、組織意識が強く、相互扶助するミャンマー人は他の地域からもどんどん集まるようになり、ますますミャンマー人にとっては住みやすい地域になったそうです。現在、高田馬場駅周辺はミャンマーの料理店や雑貨店、語学教室などが集中していて「リトルヤンゴン」とも呼ばれています。

都内でもタイ語やミャンマー語で相談ができる場所は他に少なく、新宿区以外のところからもたくさんの相談者が訪れているといいます。また、ポルトガル語、ベトナム語などでの相談が必要な時は前述の外国人総合相談支援センターとも連携をとり、内容はもちろん、言語の面でもさらに効率的な対応を目指しています。

最近の相談内容は、日常生活相談以外に、在留資格、福祉、教育から結婚や離婚、DVなど制度や法律に関するものまで複雑で多様化してきているといえます。そういったものを適切な専門機関につないであげるのも、相談窓口の仕事。ここでもプラザの他機関との連携やネットワークが活かされます。また、単純な相談だけではなく、駆け込み寺の要素もあるので、外国人にとってはとても心強い存在です。

プラザを訪れている人は開館以来、日本人も含めて10万人を超えていて、外国籍の人は127カ国になります。現在も毎月およそ2千人がプラザを訪れてきています。取材をしていた時にも何人かの中国の方々が日本語の本を読ん

だり、中国語相談員さんと仲良く話しをしたりしていました。豊富な情報やいつでも立ち寄って交流を楽しめる気楽な雰囲気「また来たい！」という気持ちにさせているのだと思います。こういうプラザには外国人や日本人はもちろん新宿の多文化共生施策を学ぶため訪れる他の自治体やマスコミからの取材も後を絶ちません。

今回伺ったお話の中でも特に印象に残ったのが「多文化共生のネットワーク連絡会」でした。多文化共生のネットワーク連絡会は、プラザを拠点に新宿区に住む日本人や外国人で構成されていて、定期的に集まり、情報交換や意見交換を行っています。このネットワークからの提案は大久保地域での多文化防災訓練や「新宿生活スタートブック」の作成・発刊など様々な活動へ発展することもあります。特に、新宿生活スタートブックは、漫画や絵を使った説明で分かりやすいのはもちろん、「引っ越しのあいさつの時には、500～1,000 円程度の簡単な手土産を一緒に持っていく」、「日本の家では靴を脱ぐのが常識。トイレでは専用のスリッパを履く。また、畳の上では、スリッパを脱ぐのがエチケット」など日本人には当たり前にも思えても、外国人にはなかなか分かりにくい日本の文化や習慣を外国人先輩からのアドバイスの形式で細かく説明しています。新宿で生活を始める外国人にとっては実体験に基づいた生きたアドバイスを聞くことができる大切な参考書になるのではないかと思います。

このように多文化共生の様々な施策が進めている新宿ですが、その反面、違法建築やごみ出し、歩道のフリーペーパーなど様々な問題も同時に抱えているといえます。こういった文化や意識の違いなどから来る問題をどう解決していくのか。また、経済的な面や時間に余裕がなく、区の施策に自分達の意見を反映させる機会をなかなか作れない外国人住民の問題をどのように把握するのか、彼らの要望や声にどのように耳を傾けて解決していくのかはこれからの課題の一つだと思います。

さらに進んだ多文化共生のまちづくりのために、新宿区では、今後教育委員会も含めた庁内部局横断的な取り組みを強化すると聞きました。新宿区がこういった問題にどう向き合っているのか、また、どのような新たな多文化共生施策を打ち出していくのか、これからも注目していきたいと思います。